

「堅く立って、動かされることなく」
ガラテヤ 3:1-6
(I コリント 15:58)

【1】恵みの自覚 (I コリント 15:58)

58 節「ですから」とあるが、これは前節を受けてのこと。ここにはイエス・キリストの勝利が語られている。この勝利は私たちに与えられるものであり、私たちが戦い勝ち取ったものではない。

信仰者のすべての営みはキリストの勝利に基づいている。パウロやコリントのクリスチャンたちの労苦、働きの結果はすべて神の恵みによるものである。このことを自覚していないとするなら、落とし穴に陥ってしまう。

パウロは「いつも主のわざに励みなさい」と勧めている。直訳では「主のわざに満ちあふれなさい」と訳すことができる。この勧めの中心は「わざに励む」ということではなく、その前にあるように(恵みに)「堅く立つ」ことである。それゆえに、私たちのわざは泉のように満ちていくのである。たとえば、クリスチャンらしく生きようと頑張ってみても私たちは疲れて長続きしないであろう。そうではなく、キリストの勝利をいつも心に留めて感謝をする。この恵みに堅く立つとするなら、その結果として必然的に喜びとともに主のわざが湧き出るのである。

【2】恵みの原理

ところが、私たちの肉の性質はこの恵みを理解することが困難になっている。御霊によって変えられなければ、恵みを理解することができないのである。肉の原理は「わざ」により頼もうとする。恵みと行いの順序が逆になってしまう。そうすると、信仰は重荷と

なり、危機に陥ってしまう。そこでパウロは恵みの原理をガラテヤの教会に教えようとしたのである。

ガラテヤ 1:6-7, 2:16 に指摘されているのが彼らの姿である。恵みを忘れた信仰のあり方をパウロは「ほかの福音」とも読んでいるのである。彼らは恵みを抜きにして他の方法で自分たちの救いを完成させようとしたからである。

【3】御霊によってはじまった

御霊ではじまったあなたがたは、肉によって完成するとでも言うのか？それは、とんだ考え違いである(3:3)。あなたがたの行い、わざは、肉から出ているのではなく、御霊がそうさせてくださっているということを教えているのである。

私たちの信仰は何よりもまず、御霊によってはじまったものである(I コリント 12:3)。神がまず私たちを捕らえてくださったのである。私たちの信念や精神力のようなものが信仰へ到達させたのではない。神が私たちを見出してくださったのである。

キリスト教暗黒時代と呼ばれている中世は教会と国家が結びついた時代であり、キリスト教全盛期でもあった。しかし、何が暗黒であったのか。それは、人々の信仰が表面的なものとなってしまったからである。ガラテヤの教会の人々もそのような危機の中にあった。救いの完成にはキリストの他にも必要なものがあると考えたからである。そうすると、私たちは罪に対して曖昧になっていく。それなりの行いによって罪を誤魔化せてしまう。しかし、それはキリストの勝利によってしか解決できないのである。この恵みに堅く立ち続けねばならない。